

Title	三田哲學會記事
Sub Title	
Author	
Publisher	三田哲學會
Publication year	1937
Jtitle	哲學 No.18 (1937. 8) ,p.209- 210
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000018-0209">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000018-0209</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 三田哲學會記事

○昭和十二年四月廿八日(水)午後三時半 於銀座交詢社例會開催。出席者四十三名。

シュプランガーの思想に就て……………船田三郎君

五月初旬のシュプランガー教授講演に先立ち、同博士の思想を解説せらる。先づ經歷著書を紹介され、その業績を要約して教育學の哲學的基礎を與へ一般文化哲學を組織立てることに在りと述べらる。自然科學的なる *Elementpsychologie* に對する精神科學的なる *Strukturpsychologie*、學問と價值評價の關係、歴史と目的理想、文化没落觀の諸問題に就て彼の思想を解説せられた。

○シュプランガー教授公開講演會

豫て日獨交換教授として來朝中のベルリン大學教授シュプランガー博士の來塾を乞ひ、文學部特別講演の名の下に左記の通り三回に互つて講演會を開催した。

(第一回) 昭和十二年五月十日(月)午後三時 於大學一番教室。來聽者四百餘名、頗る盛會であつた。

國民道德と個人道德

國民道德と個人道德の關係を述べ、結局凡べての個人主義道德の背景には國民道德ありとなされ、斯くて國民道德の諸現象の敘述を試みて個人道德に及び、これに關聯して良心を神律 *Theonomie* 及び自律 *autonome* の兩面より論じ、最後に道德の絶對性及びその宗教性に言及せられた。(通譯船田三郎君)

(第二回) 昭和十二年五月十二日(水)午後三時 於大學四番教室。來聽者百五十餘名。

近代文化に於ける精神科學の危機

中世にあつては精神科學は神學の婢であつたが現代は黨派の婢となる。宗教と學問の争ひは近代

に到りこれら兩者の中間に所謂 Ideologie が出現した爲に Ideologie と學問の戦ひとなつた。斯くて Ideologie の特性を詳述し、學問が眞理への意志 Wissenschaft であるのに對して、Ideologie は權力への意志 Willenshaft なりとし、最後に學問は十九世紀には無前提性を高調したが、現代では、殊に精神科學に在りては一定の前提性の認識が必要なる所以を説かる。又 Ideologie に依る Agitation とは異り、學問に於ては反對説の存在と意義は重要であり、論敵の理解が學問の進歩に有用なることを述べられた。(通譯 小塚新一郎君)

(第三回) 昭和十二年五月十四日(金) 午後三時 於大學第四番教室。來聽者約百二十名。  
文化と國民性

普遍性の價值に對する個性の價值を不分割的統一性又は秀逸性なりとし、國民文化の意義をここに認め、更に國民 Nation の意義を検討し分類して政治圏と文化圏の關聯を論じ、現代世界の又化的政治的状況を解説せられた。(通譯 小塚新一郎君)

○昭和十二年六月二十三日(水) 午後三時 於萬來舍例會開催。出席者十八名)

視知覺過程の研究序説……………友田善二郎君  
知覺の本質的認識に最も重要な事は、知覺の成立過程を明かにする事である點を指摘し、次にフオン・クリース、ケニツヒ、コツプ、ローリング、モス、フェリー及びランド、フェラー等の研究を参照、吟味しつゝ精確なる知覺を成立せしめる刺戟的條件を示したる後、光度、露出時間、刺戟と背景との關係を恆常ならしめ、刺戟の大きさのみを變化せしめて行つた氏自身の實驗的研究結果を報告、以て將來の研究の指針を示された。氏の結果によれば、簡單なる幾何學的圖形はそれ〴〵異なる知覺閾を有し、又知覺は四つの段階を経て發達する。